

女性産婦人科医師 8人に1人が常勤先なし

全国の分娩取り扱い施設で働く女性産婦人科医師の8人に1人は、特定の常勤先がない「フリー」の医師であることが、日本産婦人科医会の実態調査でわかった。自らの妊娠や出産、育児を機に分娩業務を離れ、そのまま常勤先を持たない人が多いとみられる。

同医会は、全国の分娩取り扱い病院1112施設にアンケートを郵送し、793施設から回答を得た。

それによると、回答施設の常勤医師の総数は4751人。1施設当たり6.0人で、2007年の4.5人から徐々に増えてきた。2008年から集計している男女別データを分析すると、男性が横ばいなのに対し、女性は2008年の1.5人から2.3人へと1.5倍に増加。

こうした状況の中、今回初めて設けた質問で、常勤以外にフリーの女性医師が数多くいることが判明。女性医師全体の12.7%、8人に1人を占め、特に東京、神奈川、千葉、愛知、大阪の大都市圏に集中していた。

(2012年12月18日付共同通信)

子宮頸がんワクチンなど 無料接種恒久化へ向け法整備

政府は、子宮頸がん・インフルエンザ菌b型・小児用肺炎球菌の3ワクチン接種について、大半の人が2013年3月まで無料で受けられる現行の時限的措置を、2013年度から恒久化する方針を固めた。予防接種法改正案を来年の通常国会に提出する。

この改正により、3ワクチンの希望者全員への接種を市町村に義務づけると共に、原則無料となっている「定期接種」の対象に含める。

子宮頸がんなどは現在、定期接種ではなく自己負担が原則だが、予防のため国と市町村は2010年11月から公費で助成。費用の1割を自己負担で賄う仕組みだが、約9割の市町村が自己負担分も助成しており、特定の年齢層の多くはすでに無料で受けられる。

さらに妊婦健診14回分の公費助成も2013年度から恒久化する。

(1月4日付共同通信)

がん細胞：「光治療」1回で破壊 米国研究チームが成功

体の外から光を当てる治療法と薬剤を組み合わせ、マウス体内のがん細胞を1回だけの治療で破壊する実験に、米国立衛生研究所

の研究チームが成功した。

チームは、近赤外光を当てると発熱する化学物質を、がん細胞特有のたんぱく質に結びつく抗体に取りつけ、がんのマウスに注射する治療法を開発。マウスに近赤外光をくり返し当てることで、がん細胞に結びついた化学物質の熱でがんが破壊された。ただ、体の深い部分のがんは腹腔鏡等を使った手術で光を当てることが必要なため、光治療の回数の増加が患者の一定の負担になる懸念があった。

この問題を解決するため、チームは、「ナノ製剤」と呼ばれるがんに集まりやすい性質を加えた抗がん剤の併用を考えた。実験では、子宮がん由来の悪性腫瘍を体の深部に発症したマウスに光治療を施し、続いて抗がん剤を注射。その結果、1回の治療で、10匹のマウスのうち6匹はがんが消え、6か月後生存した。薬だけや、1回の光治療だけのマウスは、いずれも2か月以内に死亡した。

研究チームでは、頭頸部がん、肺がん、乳がんにも効果があることを確認しているという。

(1月7日付毎日新聞)

不妊患者に卵子提供を仲介： 医師らがNPO設立

自分の卵子で妊娠できない女性に、第三者の卵子提供を仲介するため、不妊治療クリニックの医師らがNPO法人「卵子提供登録支

援団体(OD-NET)」を設立した。国内で仲介する団体ができるのは初めて。

卵子提供は、すでに自分の子どもがいる35歳未満の女性を対象に無償で呼びかける。提供者には採卵時に一定のリスクがあるほか、子どもが15歳になった時点で希望があれば、住所、氏名などが子どもに開示されることを承諾する必要がある。提供者と希望者のマッチングは、OD-NETが血液型などをもとに行なう仕組み。

同法人によると、登録開始初日ですでに41人からの申し込みがあったという。提供希望者には今後、健康状態や趣旨を理解しているかなどを専門家が確認し、登録可能か検討する。

卵子提供を受けられるのは、ターナー症候群などで卵子がなく、医師が妊娠に耐えられると判断した40歳未満の女性で、当面はすでに登録済みの患者20人が対象。新規には募集せず、加齢による不妊は対象外。治療は、不妊治療クリニック団体「JISART(日本生殖補助医療標準化機関)」加盟の5施設で行なう。

(1月15日、16日付読売新聞)

はしか： 予防接種効果で死亡者大幅減

世界保健機関(WHO)は、2000～2011年の間に、はしかによる世界での死亡者数が主に予防接種

の効果で71%も減少したと発表した。2000年に54万2000人だった死亡者数は、2011年は15万8000人とどまった。発症者数は同じ期間に58%減り、2011年は35万5000人だった。

(1月18日付時事通信)

マウス実験： 思春期のストレスが 精神疾患につながる

名城大学の鍋島俊隆特任教授らは、マウスを使った実験で、思春期に受けたストレスが成熟後の精神疾患につながる仕組みの一端を解明した。名古屋大学や京都大学などとの共同研究成果で、米国の科学誌サイエンスに掲載される。

研究チームは、精神疾患の発症に関係するとされる遺伝子を持つマウスを、人間の思春期にあたる生後5～8週に集団から隔離して飼育した。その結果、音に過敏に反応したり、意欲が低下したりするなどのうつ病のような症状がみられた。集団で飼育したマウスの行動に異常はなかった。

症状が現れたマウスの脳を調べたところ、脳内で意欲や認知機能にかかわる物質ドーパミンを作る酵素の遺伝子の働きが悪くなり、意思決定に関係する部位では活動が低下した一方、幻覚や妄想症状とかかわりの強い部位が活発に活動していた。血中のストレスホルモンの量は通常のマウスの約3倍

だった。

(1月18日付日本経済新聞)

風疹、冬に異例の大流行

国立感染症研究所の発表によると、1月21～27日の風疹患者は76人、1月の累計で254人が報告され、2008年から4年間の平均年間患者数224人を1か月だけで上回った。風疹は春から初夏に多い傾向があり、年間の患者数が2353人と大流行した昨年も1月は19人とどまっていた。妊婦が感染して、心臓などに障害が出た赤ちゃんも昨年からは6人が報告されている。

流行は首都圏や近畿圏が中心で、若い男性に多いのも特徴だ。患者数は女性の3～4倍で、20～40代が8～9割を占める。風疹の予防接種は1994年まで、中学生で女子に限られていた影響とみられる。

これを受け、厚生労働省は、予防接種を呼びかける通知を出した。免疫がない夫から妊婦が感染する危険があるため、妊娠希望者だけでなく、夫やその家族も積極的に接種をするよう呼びかけている。

(2月5日付朝日新聞)